第二講　演習問題(2)

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

これも今は昔、唐に柳下恵（りうかけい）といふ人ありき。世のかしこき者にして、人に重くせらる。その弟に盗跖（たうせき）といふ者あり。一つの山の懐に住みて、もろもろの悪しき者を招き集めて、おのが伴侶として、人の物をば我が物とす。歩く時は、この悪しき者どもを具する事、二三千人なり。道にあふ人を滅ぼし、恥を見せ、よからぬ事の限りを好みて過すに、柳下恵、道を行く時に孔子にあひぬ。「いづくへおはするぞ。みづから対面して聞えんと思ふ事のあるに、かしこくあひ給へり」といふ。柳下恵、「いかなる事ぞ」と問ふ。「教訓し聞えんと思ふ事は、そこの舎弟、もろもろの悪しき事の限りを好みて、多くの人を歎かする、など制し給はぬぞ」。柳下恵答へて曰く、「おのれが申さん事を敢へて用ふべきにあらず。されば歎きながら年月を経るなり」といふ。孔子の曰く、「そこ教へ給はずは、我行きて教へん。いかがあるべき」。柳下恵曰く、「さらにおはすべからず。いみじき言葉を尽して教へ給ふとも、なびくべき者にあらず。返つて悪しき事出で来なん。あるべき事にあらず」。

孔子曰く、「悪しけれど、人の身を得たる者は、おのづからよき事をいふにつく事もあるなり。それに、『[1]悪しかりなん。よも［A］』といふ事は僻事（ひがごと）なり。よし見給へ。教へて見せ申さん」と言葉を放ちて、盗跖がもとへおはしぬ。

（中略）

盗跖が曰く、「汝来たれる故はいかにぞ。たしかに申せ」と、怒れる声の、高く恐ろしげなるをもていふ。孔子思ひ給ふ、かねても聞きし事なれど、かくばかり恐ろしき者とは思はざりき。かたち、有様、声まで人とは覚えず。肝心も砕けて震はるれど、思ひ念じて曰く、「人の世にある様は、道理をもて身の飾りとし、心の掟とするものなり。天をいただき、地を踏みて、四方を固めとし、おほやけを敬ひ[2]奉る。下を哀れみて人に情をいたすを事とするものなり。しかるに[3]承れば、心のほしきままに悪しき事をのみ事とするは、当時は心にかなふやうなれども、終り悪しきものなり。さればなほ人はよきに随（したが）ふをよしとす。しかれば申すに随ひて[4]いますかるべきなり。その事申さんと思ひて参りつるなり」といふ時に、盗跖、雷（いかづち）のやうなる声をして笑ひて曰く、「汝がいふ事ども一つも当らず。その故は、昔、尭（げう）、舜（しゆん）と申す二人の帝、世に貴まれ給ひき。しかれども、その子孫、[5]世に針さすばかりの所を知らず。また世にかしこき人は伯夷（はくい）、叔斉（しゆくせい）なり。首陽山（しゆやうさん）に伏せ

り、飢ゑ死にき。またそこの弟子に顔回（がんくわい）といふ者ありき。かしこく教へ給ひしかども、不幸にして命短し。また同じき弟子にて子路（しろ）といふ者ありき。衛（ゑい）の門にして殺されき。しかあれば、かしこき輩は遂にかしこき事もなし。我また悪しき事を好めども、災身に来たらず。ほめらるるもの、四五日に過ぎず。そしらるるもの、また四五日に過ぎず。悪しき事もよき事も、長くほめられ、長くそしられず。しかれば我が好みに随ひ振舞ふべきなり。汝また木を折りて冠にし、皮をもちて衣とし、世を恐り、おほやけにおぢ奉るも、二たび魯（ろ）に移され、跡を衛に削らる。などかしこからぬ。汝がいふ所、まことに愚かなり。すみやかに走り［B］。一つも用ゆべからず」といふ時に、孔子またいふべき事覚えずして、座を立ちて急ぎ出でて、馬に乗り給ふに、よく臆しけるにや、轡（くつわ）を二たび取りはづし、鐙（あぶみ）をしきりに踏みはづす。これを世の人、「[6]孔子倒れす」といふなり。

（『宇治拾遺物語』による）

問一 傍線部1「悪しかりなん」は単語がいくつ組み合わされているか。最も適切なものを次の中から一つ選べ。

イ 二つ　ロ 三つ　ハ 四つ　ニ 五つ

問二 空欄 A ・ B に入る語句として、それぞれ最も適切なものを次の中から一つずつ選べ。

A イ 聞かず　ロ 聞かなむ　ハ 聞かじ
ニ 聞くべし　ホ 聞かん

B イ 帰らばや　ロ 帰らず　ハ 帰りけり
ニ 帰れり　ホ 帰りね

問三 傍線部2「奉る」、3「承れ」、4「いますかる」は、それぞれ誰に対する敬意を表しているか。それぞれ最も適切なものを次の中から一つずつ選べ（同じ選択肢を繰り返し使っても良い）。

イ 柳下恵　ロ 盗跖　ハ 孔子　ニ おほやけ

2＝　3＝　4＝

問四　傍線部５「世に針さすばかりの所を知らず」の意味として最も適切なものを次の中から一つ選べ。

イ　わずかな教養も持っていない。
ロ　わずかな尊敬も集めていない。
ハ　わずかな土地も所有していない。
ニ　わずかな子孫も生存していない。

問五　傍線部６「孔子倒れす」とほぼ同じ意味の慣用句として最も適切なものを次の中から一つ選べ。

イ　瓢箪（ひょうたん）から駒
ロ　河童の川流れ
ハ　虎の威を借る狐
ニ　木を見て森を見ず

問六　本文の内容と合致するものとして最も適切なものを次の中から一つ選べ。

イ　孔子は盗跖の存在が柳下恵の将来の出世の障りとなると思っていた。
ロ　孔子はおのずから人は良いことに耳を傾けるものであると考えていた。
ハ　柳下恵は弟盗跖の非道ぶりを恥じていて、孔子に会わせたくなかった。
ニ　盗跖に言わせれば、かしこい人ほど世間の人々から嫌われがちである。
ホ　盗跖に言わせれば、人の評判は変わりやすく、善悪は自分で決めるものだ。

第二講

〈模範解答〉

問一　ロ　　問二　A　ハ　B　ホ
問三　2　ニ　3　ロ　4　ロ
問四　ハ　　問五　ロ　　問六　ロ

〈現代語訳〉

これも今となっては昔のことだが、中国に柳下恵という人がいた。とても賢い者で、人に重んじられる。その弟に盗跖という者がいる。ある山の奥まったところに住んで、たくさんの悪人を招き集めて、自分の仲間として、人の物を自分の物とする。歩く時は、この悪人たちと一緒にいること、二、三千人である。道で会う人を殺し、恥ずかしい目にあわせ、よくない事の限りを好んでして過ごしているところ、柳下恵が、道を行く時に孔子に会った。（孔子が）「（あなたは）どこへいらっしゃるのか。自分から対面して申し上げようと思うことがあるが、（あなたは）うまいこと（私に）会いなさった」と言う。柳下恵が「どのようなことか」と問う。（孔子が）「教訓し申し上げようと思うことは、あなたの弟が、たくさんの悪いことの限りを好んで、多くの人を嘆かせている、（あなたは）どうして制しなさらないのか」（と言う）。柳下恵が答えて言うことには、「私が申すようなことを（弟は）決して聞き入れるはずがない。そうなので、嘆きながら年月を過ごすのである」と言う。孔子が言うことには、「あなたが教えなさらないならば、私が行って教えよう。どうだろうか」（と）。柳下恵が言うことには、「決して（あなたは弟のところへ）いらっしゃってはいけない。素晴らしい言葉を尽くして（あなたが）教えなさったとしても、聞き入れるような者ではない。かえって悪い事が起こるだろう。（弟のところに行って忠告するなど）あるべきことではない」（と）。孔子が言うことには、「悪いが、人間の身を受けている者は、自然とよいことを言うのに従うこともあるのである。それなのに『きっとよくないだろう。まさか聞かないだろう』ということは間違いである。まあ、ご覧なさいませ。（私が）教えて見せ申し上

げよう」と言い放って、盗跖のもとへいらっしゃった。

（中略）

盗跖が言うことには、「お前が来た理由は何だ。確かに申し上げよ」と、怒った声で、高く恐ろしいような声で言う。孔子が思いなさるには、前もって聞いたことであるが、これほどまで恐ろしい者とは思わなかった。容貌、態度、声まで人とは思えない。肝もつぶれそうで震えるけれど、心で我慢して言うことには、「人が世に生きるあり方は、道理を身の飾りとし、心の掟とするものである。天を仰ぎ、地を踏んで、四方を守り固めとして、朝廷を敬い申し上げる。下々の者をあわれんで人に思いやりをもたらすことに従事するものである。それなのに（盗跖のことを）伺うと、思うとおりに悪いことばかりするのは、その時は心にかなうようであるが、最後は悪いものである。だからやはり人はよいことに随うことをよいとする。そうなので申し上げることに（あなたは）従っていらっしゃるべきである。そのことを申し上げようと思って参上したのだ」と言う時に、盗跖は、雷のような声をして笑って言うことには、「お前が言うことは一つも当たらない。その理由は、昔、堯、舜と申し上げる二人の帝が、世で貴まれなさった。そうではあるが、その子孫は、わずかな土地も所有していない。またとても賢い人は伯夷、叔斉である。首陽山に倒れ、飢え死にした。またお前の弟子に顔回という者がいた。立派に教えなさったが、不幸にも短命だ。また同じ弟子に子路という者がいた。衛の門で殺された。そうなので、賢い連中はずっと賢いこともない。私はまた悪いことを好むが、災いは私の身に来ていない。ほめられる者は、四、五日に過ぎない。けなされるものも、また四、五日に過ぎない。悪いこともよいことも、長くほめられたり、長くけなされたりしない。そうなので自分の好きなことに随って振舞うべきなのである。お前もまた木を折って冠にして、皮を衣装として、世を恐れ、朝廷に遠慮申し上げるが、再び魯の国に追放され、衛の国に身を隠すことになる。どうして賢くなれないのか。お前が言うことは、本当に愚かである。さっさと走って帰ってしまえ。一つも聞くことはできない」と言うときに、孔子はまた言うべきことが思い浮かばず、席を立って急いで出て、馬に乗りなさるが、ひどく臆病になったのだろうか、轡を二度はずし、鐙を何度も踏みはずす。これを世の人は「孔子も倒れることがある〔＝河童の川流れ〕」と言うのだ。